



1906年

1991年10月

THE KOREAN YOUNG MEN'S CHRISTIAN ASSOCIATION IN JAPAN

かけはし

在日本韓国YMCAニュース

発行 在日本韓国YMCA
アジア青少年センター
発行人 金 守 圭

東京韓国YMCA
東京都千代田区猿樂町2-5-5 ☎(03)3233-0611
関西韓国YMCA
大阪市東成区中道3-14-15 ☎(06)981-0781



愛をもつて

憎しみと差別を乗り越えよう

— アジアの中の日本 —

東京女子大学現代文化学部教授
池 明 観

今年の夏、韓国のある女子
大学と私のいる大学との間で
学生交流がおこなわれた。

そのとき、私は二十年近く
も日本にいたため考えかたが
変わってしまったのかなあと
思うほど、驚きを感じたこと
がある。

韓国側からの参加者は主に
日本語・日本文学科の学生た
ちであり、二週間ほどの研修
のため日本に到着して間もな
いころであつたが、次のよう
な対話がかわされた。

「日本について、すでに二、

三年勉強されましたね。日本
あるいは日本文化について、
どうお考えですか」

「日本の文化についてはあま
り勉強したことがありません。
日本は、韓国に対して植民地
支配を行い、今でも韓国人を
差別している国ではあるが、
経済的に豊かになったと思っ
ています」

「日本語を正式に勉強してか
ら、日本や日本文化が前より
よくわかるようになったとは思
われませんか」

「別によくわかったとか考え

が変わったとかということば
ありません。ただ日本語がで
きるようになっただけです」

この対話を聞きながら、こ
との良し悪しはともかく、な
ぜこんな話しかできないのか
——私は心の中でその理由と
手探りせざるを得なかった。

確かに、アジア諸国におい
ての日本に関する勉強とは、
程度の差はあれこれなものな
のかもしれない。
日本の文化への関心はない。
なぜなら、日本は過去アジア
に禍いを及ぼした国で、根本

においては今も変わらない。
そんな国の文化に価値がある
とは思わないから——。

しかし、経済的に繁栄し
ているから、そのノウ・ハウ
だけは学びたい。日本語がで
ければ就職にも有利ではある
し——。

その結果、日本を訪ねてき
てもその繁栄ぶりを見るほか
は、日本人の間にあるネガテ
ィブなものをみつけては「や
つぱり、そうだ」と思う。い
わばあらさがしをしては、既
成の日本人イメージをなぞっ
ているだけとでもいおうか。
これは悲しいことである。

旅は、すばらしい出会いと
発見の場であり、何よりも自
己を修正し自分を拡大させる
ものであつてほしいからであ
る。

* * *

若いころから感動をもつて
くりかえし読んだ本に三木清
の『哲学入門』(岩波新書)が
ある。この本のなかで三木は
「関心をもつことがなければ
対象について何も知ることが
できない」、「対象について知
ることは、愛の問い」に対し
て世界が答えることである」
という、フランスの哲学者・ブ
ランシュの言葉を借りて「こ
のような姿勢は、魂の自然的
な祈り」というべきである」
といった。

私は、この三木の言葉を引
いて「差別はいけない、偏見
はいけない、憎しみをもつて

相手を眺めてはならない」と
語り続けてきた。人間はみな
同じなのである。

近代史における不幸は、支
配・被支配の関係において支
配する側は差別し、支配され
る側がそれに抵抗して憎しみ
に燃えたことである。

新しいアジアを考えると
いうことは、このような歪めら
れた関係を清算することであ
り、それによっていびつにさ
れた心を克服することなので
はなからうか。そして、その
ためには三木がいったように
暖い関心、愛、魂における祈
りをもたねばならない。これ
は、私たち人間が新たな喜び
を体験するということでも
あろう。

アジアの未来を心に描こう
とするなら過去への、またそ
の悪遺産が残っているれば現在
をも含めた批判は避けられな
いであろう。相手に過去を悔
いての償いを求めることは、
仇を返すことを意味するので
はない。

支配と被支配、差別と憎し
みの垂直関係を否定して平和
の水平関係をうち建てようと
する決意が、今、求められて
いるのである。

韓国の女子学生たちが示し
た日本へのつめたたい見方に私
は驚いたといったが、実際、
それは戦時中のアメリカにお
ける日本研究の姿勢のような
ものではないかと思つた
ほどである。敵と敵の力の根
源を知り、戦争に勝たねばな

らない——こういった視点で
日本について学んだ時代のこ
とである。
当時の日本に対するイメー
ジが、今もなおの女子学生
たちの心のなかに尾を曳いて
いるのだと思われてならなか
った。

* * *

ところで、日本人たちは何
を目的にアジアの国々を訪ね
どう考えて帰ってくるのであ
ろうか。その国の人々とのど
うな会話をかわして、日本
に戻ってくるのであろうか。
対話を求められたら、おそら
く韓国の女子学生たちと同じ
ような言葉を返すことになる
と思えて仕方がない。

「あなたの国の文化について
はあまり勉強したことがあり
りません。貧しい国へ来ると
日本の円は価値があるので十
分楽しめると思っています」

「旅行では、ただ過去の文化
遺産や日本とは違う自然と風
習に接するだけです。アジア
の国々に対する考えかたが変
わったということはありませ
ん。やつぱり日本は豊かで自
由でよい国だと、ますます確
信するようになりました」

韓国の女子学生たちの日本
批判、ある意味での憎しみが
昔からいつこうに変わってい
ないように、日本の旅行客の
アジアに対するイメージ、差
別感もなかなか変わらないの
かもしれない。

支配する国は偉大であり、
富だけが価値の標準であり、
その競争に敗れた国や人は劣
悪である——といった尺度は
実に近代史的なものではない
か。そして、そのような尺度
をもった人の目には、アジア
のよさ、その人間的な悲しみ
や喜びが見えてくるはずがな
い。

愛していれば相手のすばら
しさが見えてくる。だが、憎
み差別していればそんなもの
は見えてこない。
人間は、相手の欠点だけを

見、憎しみと差別の心を正当
化することで安心するものな
のだらうか。先入観をうち破
って新しく生きることを、み
なそんなに思ひ嫌うものなの
だらうか。

* * *

三木がいうように「関心」
をもつこと、「愛の問い」を
もち「魂の自然的な祈り」を
もつということは、対象の「完
全な存在と価値に達する」こ
とである。

それは、単に相手を理解す
るということだけにとどまる
ものではない。愛するといふ
ことは相手の「存在」に達す
ることであり、相手の悲しみ
苦しきまでも共にするといふ
ことでなければならぬ。そ
こで相手に対する私たちの働
きと呼び起こされる。キリス
ト教では「愛する者のために
は生命をも捨てる」といつて
きたではないか。

アジアの悲しみ、貧しさ、
苦しみを眺め、日本の豊かさ
を確認しただけで自らを閉じ
てしまつてはならない。心を
開いて共感し、ともに分かち
合おうとしなければ、日本
人の心はいっそう狭くみすば
らしくなつてしまつてしま
う。

他者を思うことは自分のた
めでもある。心が開かれれば
おのの立場でなしうること
が探し出せるであらう。
最後に一つだけつけ加えて
おこつ。

あのよう日本につめたか
つた韓国の女子学生たちが二
週間の旅を終る帰国の途につ
こうとしたとき、日本の女子
学生たちと手を取りあい涙を
流していたことを——。

同じ人間なのだ。国という
壁がいけなかったのだ。私は
ホッとしたいと思つた。聖
書の言葉がふと脳裏をかすめ
た。
『そこであなたがたは、もは
や異国人でも宿り人でもなく、
聖徒たちと同じ国籍の者であ
り、神の家族なのである(エ
ペソ人への手紙第2章19節)』